

# 「後退」する文学史 —本多秋五のプロレタリア文学史観—

木村 政樹

## 要旨

本稿は、本多秋五のプロレタリア文学史観が、戦後の文学状況に対する応答として形成されたことを論じたものである。

まず、本多が「宮本百合子論」において、小林秀雄「私小説論」の影響を受けつつ、三二年テーゼの歴史観に応じようとしたことを考察した。次いで、『白樺』派論で本多が、中村光夫の「風俗小説論」をふまえつつ、革命をめぐる 1950 年代前半の状況を問題化したことを指摘した。最後に、転向文学論で本多が、小田切秀雄「頽廢の根源について」の議論を評価し、統一戦線のあり方について思考したことを明らかにした。

本多はこれらの一連の批評について、自身の「立場」が「後退」していく過程として捉えていた。とはいえ、それは文学運動からの撤退ではなく、プロレタリア文学史観の再考を通して、積極的な介入を試みたものであったといえる。

**キーワード：**本多秋五、プロレタリア文学史、宮本百合子、『白樺』派、転向文学

## 1. 問題の所在

本稿では、本多秋五のプロレタリア文学史観の検討を通して、本多がいかに戦後の文学状況に応答したのかを考察する。本多は『近代文学』同人として戦後に活躍し、多くの文藝批評を書いたが、なかでも有名なのは、創刊時に巻頭エッセイとして寄稿した「藝術 歴史 人間」(1946・1)である。本多はここで、「過去のプロレタリア文学運動」の理論について、「当時あれ以外にも、あれ以上にも正しい理論はなかつた」と述べている。そのうえで、「ただ今後は、歴史の成熟によつて明瞭になつた不足だけは、是非補はねばならぬと思ふだけである」と判断し、藝術家は「私」を守り、自我を生かさねばならぬ<sup>1</sup>と主張した。

こうした本多の批評は、「政治の優位性」の孕む非人間性を批判し、自我の回復を求めたものとして評価されてきた。伊藤成彦は、この評論を「戦後評論の傑作と呼ぶにたる」「戦後文学の基本性格を明確に予兆したもの」と称賛し、従来「本多秋五は、なによりも戦前プロレタリア文学の理論的補正者として位置づけられてきた」<sup>2</sup>としている。

プロレタリア文学再検討は、本多にとって「日本文学」の核心に関わる問題であった。例えば、1953年に本多は、「プロ文学再検討とか、国民文学論とかいうものは」「現役のぴんぴんしている文学と文学者には無縁の閑文字と思われるかも知れない」が、「巨大な外国支配の磁力に日本列島がワシづかみにされているという気象配置につつまれて、日本文学は、そう思う思わぬは別として結局はこの閑文字の外に逃れられぬのである」<sup>3</sup>と述べている。ところが、1956年になると本多は、「民主主義文学」は「敗戦直後にもつていた前進的姿勢——日本文学全体に対してもつていた前進的姿勢を失った」<sup>4</sup>と判断するに至る。「もはや「戦後」ではない」といわれた時期に、戦後文学の当事者によってこのようにみなされたことの意味は大きいだろう。ともあれ、それまでの本多の批評が、「民主主義文学」の「前進的姿勢」に随伴しつつ、批判的に介入しようとしたものだったことはたしかである。

こうした経歴から、文藝評論家としての本多は、「政治と文学」の問題に関わる小林秀雄論や蔵原惟人論の書き手として一般に知られている。本多の議論は『近代文学』同人の傾向を代表するものでもあった。周知のように、『近代文学』の第1巻第1号には蔵原惟人、第2号には小林秀雄を囲んだ座談会記事が掲載されている。のちに本多は、「出発当初の『近代文学』同人は、誰かの言葉をかりていえば「蔵原惟人と小林秀雄を重ねてアウフヘーベンする」方向を望んでいた」<sup>5</sup>と振り返っている。他方で、本多は、「日本近代文学研究」における文学史家としても名高い。とりわけ、宮本百合子論、『白樺』派論、転向文学論に関しては、研究の土台を構築した先駆的な仕事だとみなされている<sup>6</sup>。重要なのは、これらの本多の研究が、すでに戦後十年間のうちに開始されていたものだという点である。本多は時を経て文藝評論から文学研究へと移行したのではなく、戦後の出発時から「研究」の重要性について認識していた。

本稿の目的は、本多の文学研究的な成果である、百合子論、『白樺』派論、転向文学論にみられるプロレタリア文学史観を検討することにある。それらは、時局的なエッセイとは異なり、明確な批評的メッセージを読み取りにくいタイプの文章である。だが、これらの論考は本多の批評的スタンスと無関係ではない。それは、「政治と文学」の問題を歴史的な視野から把握するために不可欠な思考法だったといえる。

本多の業績は、批評と研究というジャンルに分けて評価されがちだが、ここで焦点をあてたいのは、研究的にみえる方法が孕んでいる、批評的な意義である。本多の論考を先行研究として捉え、乗り越えようとするのではなく、それ自体を研究対象とみなし相対化することで、本多が語った文学史を、戦後状況へ応答する動態的な過程として把握することができるだろう。なお、以下の考察は、時系列に沿って、百合子論（第2節）、『白樺』派論（第3節）、転向文学論（第4節）の順に行なっていく。

## 2. 小林秀雄「私小説論」と三二年テーゼ——宮本百合子論

本多の宮本百合子論の考察に入る前にまず、本多の研究的な方法がどのような文脈からきているのかをみておきたい。本多は戦前にプロレタリア科学研究所に所属し、文藝史研究についての論考を書いていた<sup>7</sup>。したがって、遡ればその「研究」は、戦前のプロレタリア文学運動に内在していた志向であった。だが、敗戦を迎えて本多は、「小林秀雄論」（1946・4）で次のような反省を行なった。「プロレタリア文学は、過去の遺産の継承といふことを事ある毎にくり返してゐたが、実際には殆どいふに足る遺産の継承はおろか、遺産の調査研究すら満足にはしてゐなかつた」<sup>8</sup>。このように、戦前においては「調査研究」が不十分であったと認識されたのである。この意味で、本多のプロレタリア文学批判は、「調査研究」という方法的な問題としても捉えられていたといえる。

1954年には、本多は次のように述べている。「僕はいままで、どちらかといえば実地踏査をして、その実地踏査にもとづいてレポートをつくる型を学んできました」「僕はここ数年、白樺派のことを調べてきました。ごく最近には、転向文学と転向のことをすこし調べました」<sup>9</sup>。このように、本多は自覚的に「調べて」書くスタイルで言論活動を行なった。本多自身が述べるところによれば、「敗戦後における私のほとんど唯一のテーマ」は宮本百合子論であり、その「進行過程」での「副産物」として『白樺』派論も書かれることになった<sup>10</sup>。百合子の文学的な背景をより理解しようとするところに研究的な関心が生まれ、本多を『白樺』派論へと赴かせたのだといえよう。それらがいわゆる実証的な意識に貫かれていることは、本多の論考が現在も文学研究で参照される一因となっており、本多の文学史を考えるうえで重要な特徴だといえる。ただ、文学史は資料収集のみによっては形成されない。資料を元に文学を歴史化する過程で、大きくいって二つの課題が問われることになった。

ひとつは、過去を学ぶ意味の問題であり、もうひとつは、文学史観の問題である。まず、前者は、過去の文学遺産をいかに批判的に摂取し得るか、というテーマに関わる問題である。この問題は、プロレタリア文学運動において、「文学遺産継承」論というかたちで蔵原惟人らによって提唱されていた<sup>11</sup>。上記の引用で「過去の遺産の継承」と言われているのがそれを指す。それは戦後において、過去の文学についての認識をいかに現在の文学運動に接続するか、という問題として、継続して思考されたといえる。

後者は、過去の文学をどのような歴史認識において捉えるか、という問題である。この点について考える際に重要なのは、他の論客から本多が影響を受けたという事実である。例えば本多は、「小林秀雄論」のなかで、小林の「私小説論」（1935・5—8）の、「わが国の自然主義小説はブルジョア文学といふより封建主義的文学」<sup>12</sup>だという主張に言及している。これからみていくように、本多は小林秀雄、中村光夫、小田切秀雄らが提示した文学史論を参照することで、自らの文学史観を形成していったと考えられる。

以上をふまえて、本多の宮本百合子論を検討していきたい。本多は1947年に「宮本百

百合子論<sup>13</sup>という評論を発表した。初期の本多の百合子論を代表する論考であり<sup>14</sup>、以下、このテキストを論じていく。ここで本多は、プロレタリア文学には「どう考へてみても、プロレタリア文学といふ觀念に一致しないものが多かつた」と述べている。作家の階級的出自などを考えたとき、「プロレタリア文学」という呼称が相応しいかどうかは重大な問題であろう。本多は「いはゆるプロレタリア文学は、何よりもまづ、マルクス主義が文学の中へ入つてきたことによつて繁栄した文学だつた」と考えた。そこで、「当時のいはゆるプロレタリア文学は、むしろマルクス主義文学と呼ぶ方が適當だらうと思はれる」と概念を規定し、「いはゆるプロレタリア文学」、つまり「マルクス主義文学」を歴史的に位置づけようと試みた。

本多は、「いはゆる「プロレタリア文学の遺産」——即ち、マルクス主義文学の遺産」について考えるにあたり、「遺産といふものを、「歴史的意義」などといふものから区別し、それぞれの作品が、それぞれの時代の刻印をおびつつ、それぞれの時代固有の美をもつて相競ふべき「絶対」の場に引き出し、そこでの値を問ふとしたらどうだらう？」と問うている。文学「遺産」を特定の時代における「時代固有の美」として救い上げようというこの提唱は、発展段階の各過程に位置づけられる限りでの「歴史的意義」しか認めないタイプのマルクス主義的な文学史への批判であると考えられる。

とはいえ、これは過去の「遺産」を評価する際の視角の問題であつて、本多が何らかの文学史観を提示していないというわけではない。それをみるためにまず、以下の箇所を確認しておこう。

[……] 単に学校を出たといふだけの「貧乏人」の息子、——さうしたインテリゲンチャばかり多い日本において、貪婪のあまりプロレタリアートの側に移行したブルジョア・インテリゲンチャといふものの例は、實際まことに珍らしい。気ぜはしい言ひ方がゆるされるなら、ここから僕は、——或は僕もまた、志賀直哉は封建貴族に近い階級から出てブルジョア文学に磨きをかけた。[……] それと同様に、宮本百合子は興隆するブルジョア階級から出て、プロレタリア文学を押しすすめたといひたいのだ。

かういふ見方の端緒をあたへたのは、実は小林秀雄である。彼は「私小説論」の中で、半ば逆説的にそれをいひ、今日ではその意見を無断借用してゐる例が二、三見うけられるのであるが、時間の経過するにしたがつて、小林秀雄の見方の正当さは、争ひがたいものになつてきたと思はれる。（下線引用者）

ここで本多は、小林の「私小説論」に示唆を受けたことを明示している（ただし、下線部は『転向文学論』（未来社、1957年）収録時に削除されている）。小林は「私小説論」において、「わが国の自然主義小説はブルジョア文学といふより封建主義的文学」だと述

べたほか、志賀直哉ら「白樺派」作家が「従来の私小説の決定的な否定」を行ない得なかったこと<sup>15</sup>、「マルクス主義文学」こそが「私小説」を「征服」した<sup>16</sup>ことを主張していた。この小林の主張と比較すれば、本多が『白樺』派の志賀直哉を「封建主義的文学」ならぬ「ブルジョア文学」としたことは、「私小説論」を参照したうえでの本多による修正的な見解であったことがわかる。

このような小林と本多の差異は重要だが、ここで本多が小林の「見方の正当さ」を認めていること、小林が「自然主義小説はブルジョア文学といふより封建主義的文学」だとしたことをふまえれば、本多の文学史的な見取図はさしあたり以下のようなものとして理解できるだろう。すなわち、「封建主義的文学」…自然主義小説、「ブルジョア文学」…志賀直哉、「プロレタリア文学」…宮本百合子、というものである。

しかし、この本多の議論は、さらに複雑な論理を構成している。例えば、本多は次のように述べている。

ところで、一種の発熱状態としてのマルクス主義文学の盛行は、一方プロレタリア文学を自覚的なものにするとともに、日本における文学の近代化にも貢献した。「プロレタリア文学」は、本来「ブルジョア文学」が果すべかりし役割をも、日本においては果したと考へられるのである。宮本百合子の文学は、矢張り日本におけるプロレタリア文学ではあるだらう。だが、それはいはゆる「きつさき」の出た文学の、その「きつさき」の部分〔……〕についていはれることであつて、彼女の文学の引く裳は、本来「ブルジョア文学」によつて調へられてあるべかりし性質のものだと思ふ。

この本多のプロレタリア文学論は、小林の「私小説論」を連想させるが、用語がより類似しているのは、同じ1935年に書かれた、中村光夫の文学史論である。中村は、「我国のプロレタリア文学は文学のブルジョア化（近代化）運動の表はれであつた」<sup>17</sup>と述べていた。

ここで本多が強調しているのは、いわゆる「プロレタリア文学」が実質上の「ブルジョア文学」でもあったということだ。そして、本多はこの「プロレタリア文学」の可能性を、百合子の文学にみた。百合子の文学の「裳」の部分は、「本来「ブルジョア文学」が行なうべきもの、つまり実質的に「ブルジョア文学」を代行したものだ」とみなされている。ここまでの議論を整理すれば、先の図式は以下のように再整理した方が適切だろう。すなわち、「封建主義的文学」…自然主義小説、(実質上の)「ブルジョア文学」…志賀直哉／宮本百合子、「プロレタリア文学」…宮本百合子。

では、本多が提出した、このような複雑な見取図は、どのような意味を持つのだろうか。先述した小林と中村の文学史観は、当時、中野重治から批判を受けた。中野は、自

然主義はブルジョア文学だと理解し、「日本の自然主義文学が封建主義文学だつたとか、日本にはブルジョア文学などいふものはなかつたのだとかいふことは間違い」<sup>18</sup>だと主張した。こうした問題は、日本共産党の二段階革命論がその背景にあると考えられる<sup>19</sup>。日本共産党は、いわゆる三二年テーゼにおいて、「ブルジョア民主主義革命」から「社会主義革命」へ、という革命戦略を採用した。まず当面の目標が「ブルジョア民主主義革命」にあるとすれば、それは文学の認識にも関連するだろう。

この点からみて、本多の百合子論で重要なのは、三二年テーゼの解釈のされ方そのものを論点にしているところである。本多によれば、党派性や政治の優位性を掲げたプロレタリア文学の指導方針には、「三二年テーゼに対するある種の解釈——特殊な革命前夜感が作用してゐる」という。この「ある種の解釈」とは次のようなものだ。当時において、三二年テーゼは、「社会主義革命への強行的な転化の傾向をもつブルジョア民主主義革命」だと明瞭に規定されてゐた。だが、その文面は、「強行的な転化」にアクセントを置いて理解され、革命は近きにあり、しかも、それは直ちにプロレタリア革命であつて、ついでにブルジョア民主主義革命をも含めて遂行するものであるかのやうに、実際には感受されてゐたと思ふ。つまり、本多によれば、当時の三二年テーゼの読まれ方では、「ブルジョア民主主義革命」に「アクセント」が置かれていなかった。

本多は、このように過去のプロレタリア文学理論の問題点を捉えたいうで、「おぼろげながら、平和革命と新民主主義の展望は、制度の革命と精神の変革、革命と文学の関係を理解させつつある」と記した。1946年の日本共産党の「平和革命」方針は、「ブルジョア民主主義革命」の完成を当面の目標に設定しており、ここにおいて本多の見解は、戦後の情勢における三二年テーゼ解釈の問題と関連せざるを得ない。だが、この記述からは、本多が「平和革命」をどのように理解し、日本共産党にどのような観点から賛同していたのか、判断しがたい<sup>20</sup>。ここで本多は、なにか旗幟鮮明な政治的意見を表明しているわけではなく、また、「革命」と「文学」がいかなる「関係」にあるのかも、明瞭に述べないままである。こうした現状についての認識は、あくまで「おぼろげながら」本多が「理解」したところのものに留まるのだ。

ただし、以上をふまれば、本多が志向した方向性はみえてくるだろう。まず、本多は、「革命前夜感」によって情勢認識を誤った戦前のプロレタリア文学理論を反省した。そして、その反省を生かして、今後の「制度の革命と精神の変革、革命と文学」に関して、より着実な前進を目指したと考えられる。こうした認識の下で本多は、百合子の文学を「ブルジョア文学」を代行したものとして評価し、そこから今後の文学に生かすべきものを学び取ろうとしたのだといえよう。

本多が百合子を評価している点について、具体的にみていきたい。まず、本多は、「バルザック論を、とにもかくにも、当時あれだけに書きこなした彼女の素養」や、ジッダの『ソヴィエト紀行』翻訳に際し「いち早くあれだけ持久力ある防波堤」を「きづき

上げた彼女の眼識」を評価した。「宮本百合子をして、左翼用語を封じられるや、永遠に絶句してしまふほかない石頭どもと異らしめたものは、たしかにまづ彼女の文学的布陣の広さと深さであつた」、と本多は語っている。また、本多は百合子について、「フランスに生れあはせてゐたら、さしづめマダム・ド・なにがしと呼ばれて一流のサロンを主宰」していただろう、と形容している。以上からわかるように、本多が評価しているのは、百合子の文学的教養の豊かさである。その豊かさこそ、「転向続出時代」に「非転向の高み」に到達し得た百合子と、その他大勢のプロレタリア文学者を分けるものであったとされる。

また、本多は「志賀直哉と宮本百合子」を「案外近いと見る」視点を提示した。本多によれば、志賀と百合子は「好悪がそのまま善悪に通じる」境地において共通しており、それは「この世をば我が世とぞ思つてゐる階級の心理をはなれて」考えられない。本多は、ブルジョア階級という出自に由来する、百合子の力強い自己肯定を評価する。そして、この百合子の「健康な自我」こそがプロレタリアートへの移行を可能にしたという。「彼女が「プロレタリアートの側に移行」したのは、過剰なまでに豊富な彼女の生命力が、一そう「たつぷり」生きることを要求した結果、早くも日本のブルジョア生活に食ひ飽き、その先のいはば栄耀の果ての餌食としてプロレタリアートの理想を掴んだのだ」。

本多はこのように、百合子の「自我」の豊かさとその自己肯定を、「プロレタリアートの理想」に繋がりうるものとして見出した。文学史という物語に、そのような登場人物を理想的な主体として描きこむことが、本多の狙いであつた。それは「自我」を生かせと主張する本多の戦後文藝評論のヴィジョンにも通じる。ただ、繰り返せば、それを単に理念としてでなく、歴史的な認識として把握することを可能にしたのは、小林秀雄「私小説論」の影響を受け、三二年テーゼに承接しながら本多が提示した、宮本百合子が「ブルジョア文学」を代行したという文学史的な見取図なのである。

### 3. 中村光夫「風俗小説論」と知識人の二律背反——『白樺』派論

本多は1947年から49年の『近代文学』に宮本百合子論を6本発表した。しかし、これらは本多自身によっても「本にする値打のないもの」<sup>21</sup>とみなされ、生前全集にも収録されなかった<sup>22</sup>。中山和子は、本多は百合子論を書くうちに「もはやどうしても前に進めなくなつたらしい」ので、「後戻りして「白樺」文学研究に本腰を入れ」<sup>23</sup>たのだと整理している。本多が『『白樺』派の文学』（講談社、1954年）にまとめた論考を書いたのは、1950年から53年にかけてのことである<sup>24</sup>。たしかに、これらの考察は、百合子に至る文学史の系譜を遡って整備するものであっただろう。しかし、なぜこの時期に、『白樺』派論が書かれる必要があつたのか。

大津山国夫はそれを、武者小路実篤から学ぶことによる、本多の第二の「転向」であると捉えている<sup>25</sup>。なるほど、この時期の本多は武者小路について注目している。だが、

本多の『白樺』派論全体の比重が、武者小路に置かれているとは考えにくい。一般に本多の『白樺』派論は、志賀直哉や有島武郎についての考察で知られている。また、のちに本多自身は、あの有島武郎論は「本多秋五論」だとまで述べた<sup>26</sup>。だとすれば、本多が自己を仮託しているのは有島だということになるが、とはいえ、有島が無批判に全肯定されているともいい難い。以上を勘案してみると、大津山のいうように「転向」とまで述べる認識の転換があったといえる根拠は乏しいのだ。本多は次のように述べていた。

武者小路や志賀は、思想を投げ棄てることによつて自己を生かした。有島は思想を背負つてよろめき、遂に倒れた。僕等は誰に学び、どのやうに生きてらいいのか？これは僕が自分にさし向けねばならぬ問いである。このとき、僕の前には宮本百合子が来て坐るのだ。<sup>27</sup>

このように、本多は自らの生き方を、『白樺』派よりも百合子から学ぼうとしている。この点は百合子論の延長にあり、だとすればやはり「転向」ということばは相応しくないだろう。だが、たしかにここにはある種の態度の変更をうかがうことができる。本多は『『白樺』派の文学』の「あとがき」で次のように述べている。

現在の私は、これら諸篇を書いたときよりは後退した立場で仕事をしてゐる。ここに収めた諸篇そのものが、敗戦直後にすこし書きはじめた『宮本百合子論』から一步後退した地点で書きはじめられたものであつた。[……] 私は後退につぐに後退をもつてする批評家であらうか、それを私に強ひたものは何であるか、これらを私はいま明らかにいふことが出来ない。<sup>28</sup>

このように、本多は一連の「後退」劇として自分の「立場」を把握した。この「あとがき」の末尾には、1954年6月30日という日付が記されているが、この時期は本多が転向文学論を展開していた時期にあたる。つまり、百合子論から『白樺』派論へ、『白樺』派論から転向文学論へと「後退」していった、と認識されているのだ。この「後退」の過程で、本多の文学史観はいかに変化しただろうか。

先にみたように、1947年の本多は、「平和革命」方針が示唆する革命と文学の未来について、小林の「私小説論」を肯定的にふまえつつ思考していた。それに対して、『白樺』派論では、1950年代前半の現実に応じるため、中村光夫の「風俗小説論」（1950・2—5）を評価することで、文学史的な見取図を再考したと考えられる。本多は、以下のように研究史を整理している。

日本におけるリアリズム文学が、藤村の『破戒』を境として日本的な屈折にむか



つたといふ史観、すなはち、文学と社会思想との結びつきはその後ふたたび見失はれたといふ史観は、蔵原惟人の『現代日本文学と無産階級』（昭和二年）によつて礎石を置かれ、その史観の流れのうちに平野謙の『破戒論』が書かれ、それが中村光夫の『風俗文学論』に発展させられて今日の定説になつてゐる。しかし、有島の文学とそれの挫折には、『破戒』を峰とするリアリズム文学の挫折と同じものが、もういちど繰り返されてゐると思ふ。<sup>29</sup>

周知のように、中村は「風俗小説論」で、日本文学の分岐点を、田山花袋「蒲団」と島崎藤村「破戒」に見出し、前者が勝利することで後者のリアリズムは敗北していったと主張した。この中村の文学史の見取図が、花袋「蒲団」のながれのうちに藤村「破戒」を位置づけた<sup>30</sup>小林の「私小説論」と異なることは一読して明らかである。

もちろん、こうした小林や中村の思想的内実については別途詳しく考察される必要がある。ここで改めて確認したいのは、本多の主張に、「風俗小説論」における「破戒」評価が付け加えられたことである。上牧瀬香は、志賀直哉から宮本百合子に至る文学史を構想していた本多が、『白樺』派論で「〈有島—宮本の線〉」を「発見」したことの意義を丹念に整理しているが<sup>31</sup>、ここではこの問題が、「風俗小説論」の「破戒」評価の導入と、その見取図の本多流の修正、すなわち、島崎藤村—有島武郎の系譜が見出されたことに関わっていることを強調しておきたい。

こうした本多の文学史観の変化は、次のようにまとめられるだろう。百合子論の本多は、百合子の文学を実質上「ブルジョア文学」を代行したものとみたうえで、そのルーツを「ブルジョア文学」志賀直哉に遡って求めようとした。それに対し、有島論における本多は、自然主義文学にあったとされる「リアリズム」の可能性が、時代を下って『白樺』派の有島にも反復されたのではないかとみている。

この変化を理解するには、中村の「近代」関連の用語法の変化をふまえておくとうわかりやすい。1935年の中村は、「ブルジョア文学といふものがなかつた」「有るものはたゞ封建的な私小説だけであつた」日本において、「プロレタリア文学」こそが「近代文学」の「礎石」を築いたと主張していた<sup>32</sup>。それに対し、「風俗小説論」では、島崎藤村の「破戒」は、「ヨーロッパ近代文学の影響の内面化に重要な一歩を進め、或る意味でその「近代」を自己の所有とする端緒を開いた」<sup>33</sup>試みであつたと捉えられている。つまり、日本における「近代文学」概念をめぐって大きく評価が動いているのだ。

本多の場合、百合子論においてすでに志賀直哉を遡及的に評価していたため、中村のような明確な用語上の違いがみえにくい。だが、上述した認識の変化が起こったことは見逃せない。『白樺』派論で本多は、百合子について詳細に語っていない。だが、これまでみてきた本多の文学史観からすれば、百合子に期待されている文学史的な位置は十分に推し測ることができる。百合子は、旧来の封建的な文学を切断し、文学を刷新した存

在というより、藤村や有島がもっていた可能性を、批判的に発展させていくような存在としてみなされようとしたのだといえる。

本多が『白樺』派論を展開した1950—3年は、朝鮮戦争の期間にあたっている。民主主義文学運動もまた、米ソ関係の変化に伴う日本共産党の路線転換によって変質した。とりわけ、1950年の「コミンフォルム批判」によって、戦後の日本共産党の方針であった占領下の平和革命方式が根本的に否定されたことが、衝撃を引き起こした。それは文化運動にも波及し、日本共産党の五〇年分裂を背景として、『新日本文学』と『人民文学』が対立することとなる。1951年に百合子が死去した際、『人民文学』誌上で激しい罵倒が行なわれたことはよく知られている。

ここにおいて、「平和革命」の方向で「おぼろげながら」想望された本多の百合子論が、軌道修正を迫られたことは想像に難くない。本多の「後退」の背景には、敗戦時に「ブルジョア民主主義革命」を当面の目標として以来、数年間にわたって模索された、日本共産党の「前進」のプログラムそのものの崩壊があったのである。もちろん、百合子を理想とする本多の基本的な方針は変わっていない。だが、1950年代前半に生じた現代的課題に応接するにあたって本多は、その問題の端緒を『白樺』派に探ろうとした。そして、百合子評価は、『白樺』派の先に見据えられるべき課題としての位置に移行したのである。本多は、晩年の有島武郎にふれて、次のように述べている。

有島が自我実現の努力の果てに見出したものは、現在のわれわれにとつて決して昔ばなしではない。いまの知識人は、どれだけそれを意識してゐるかは別問題として、革命待望と革命恐怖との二律背反に悩まされてゐるやうに思へる。[……]それが日本では、いつも戦争が[……]この深淵のうへに煙幕をはり、[……]それとの正面きつた対決をいつも遷延させてきたと思はれる。現在は国際関係が逆にそれを明瞭化してゐるところがある、といふだけの相違ではあるまいか？<sup>34</sup>

これより先に本多は、「同人雑記」(1952・6)のなかで、伊藤整の文学論に「革命の到来を待ち望みながらまたそれを恐れてゐる」という「性格」を見出し、それは「有島の時代以来すこしも変つてゐないやうな気さへして来た」<sup>35</sup>と述べていた。本多が有島武郎を通して問題化したのは、米ソ対立、朝鮮戦争によって「明瞭化」された、「知識人」の「革命待望」と「革命恐怖」であった。これは現在も乗り越え困難な課題として認識されながら、将来的に解決されるべきものとして把握されたのである。

『白樺』派の「自己を生かす」ということについて本多は、「彼等の文学がいまの僕等に意味ある唯一の点は、その「自己を生かす」の専一さ、その徹底性にある、とさへ僕は断言したい」<sup>36</sup>と述べている。これが、本多の戦後文藝評論の自我肯定のマニフェストに連なるものであることは見やすい。ただし、この言い方からわかるのは、『白樺』派

の現在性は、この「唯一の点」にしかない、ということでもある。志賀直哉・有島武郎の文学者としての軌跡は、そのまま模範的な理想たりえない。おそらくは、有島の突き当たった問題を抱え込みつつ、有島のように傷つき倒れることない「自己」の肯定が求められていた。本多は、『『白樺』派の文学』に収録された論考を書き終えたあと、「転向文学」問題を軸として、改めてプロレタリア文学を検討することとなる。

#### 4. 小田切秀雄「頽廢の根源について」と統一戦線——転向文学論

『新日本文学』と『人民文学』の対立を解消していくこと。それは、当時の民主主義文学運動にとって喫緊の課題であった。新日本文学会に所属する本多は、この対立は「政治の焼きゴテが、政党内の対立抗争といふ焼きゴテが、垂直に文学団体をさし貫いたところに起つた」と考えた。そして、「新日本文学と人民文学の「統一」の道を探るにあたって、「政治と文学とはスッパリ遮断しなくてはならない」と思案していた<sup>37</sup>。

こうしたなかで、プロレタリア文学の再検討は、1950年代の文化運動と切り離せないかたちで問われた。本多は、当時隆盛していた転向をめぐる議論の対立を整理して、それが「いまの統一戦線の問題から来ている」と述べている。「現在、逆コースになって来ている時代に」「どのようにして統一戦線を形づく」るかという課題が、「過去の経験を現在に生かそうという考え方」<sup>38</sup>を生み、議論を構成しているのだという。

本節ではこの時期の本多が、小田切秀雄の影響下にあったことに注目したい。本多の転向文学論については多くの先行論があるが<sup>39</sup>、それらは小田切との関係について考察していない。だが、本多が小田切の「頽廢の根源について」（1953・9）を、手放しといってよい程の勢いで称賛していたことは、きわめて重要な意味をもつと考えられる。「批評歴十五年ほどの小田切秀雄が書いた最上の文章」「彼の一句はコロンブスの卵であつた」「ぼくにも多少の誇張癖があれば筆をとつて、「ウマゴヤのなかで人知れず赤ん坊が生れた」、と書くのを辞せないであろう」<sup>40</sup>という褒辞からわかるように、小田切のこの論考は画期的なものとして本多に認識された。

『近代文学』1954年2月号では、「座談会 プロレタリア文学運動の再検討」が掲載された。出席者は蔵原惟人・宮本顕治・小田切秀雄・野間宏・本多秋五・荒正人・佐々木基一・平野謙（平野は司会）という錚々たる論客である。この座談会でも本多は、まず「頽廢の根源について」の主張に賛同するところから始めた。この時期、本多は小田切を一貫して評価しているのである。

そこでまず、「頽廢の根源について」の内容を確認しておきたい。小田切は、戦前のプロレタリア文学者は「どうして文学運動をもつばら共産主義文学運動としてのみ展開したのか？」と批判し、「共産主義者以外の進歩的な作家や文学活動家をも広汎に結集しての革命的ないし人民的な文学運動をどうして展開しなかったのか？」<sup>41</sup>と問いかけている。プロレタリア文学史についての様々な目配りがなされたうえで展開された議論だが、

その中心となる主張は、これに尽きている。つまり、この小田切の論考は、文学運動のあり方を考えたとき、「共産主義文学運動としてのみ」だけではなく、「共産主義者以外」も「結集」したものが望ましいのではないかと主張したものであった。これが本多に「コロブスの卵」といわしめたものである。

ここで注目したいのは、「共産主義者」という用語が、本多のエッセイ「転向文学」<sup>42</sup>において重要なキーワードとなっていることである。この論考は、本多が自らのプロレタリア文学史観を集約的に示したものである。冒頭で本多は、「まず最初に、ことわっておかねばならないのは、この文章を書くわたしの立場である」と述べたうえで、次のように続けている。

わたしは、現在、共産主義者ではない。かつて共産主義者であったこともない。——かつては共産主義の立場にきわめて近い立場に立っていたことがあるが、当時といえども、わたしは本当の意味での共産主義者ではなかった。

本多はここで、「ひとびとは共産主義の信奉者が共産主義から遠ざかる現象をさして一般に「転向」とよびならわすようになった」と述べている。だとすれば、そもそも「共産主義者ではない」本多の「立場」では、一般的な意味での「転向」が起こらなかつたことになる。上牧瀬はこの点について考察し、「転向文学を批評する本多自身の転向に関する自己批評の視点が失われてゆく」<sup>43</sup>と否定的に捉えている。

だが、「共産主義者ではない」ことは、小田切の議論からみれば、単純に否定的なことではない。むしろそうした人々が運動に参画することこそ運動の核心的な意義が見出されていた。この本多の自己認識もまた、「自己批評の視点が失われてゆく」というより、ある種の「自己批評」を通したプロレタリア文学史観の提示であったと考えるべきではないだろうか。では、本多は「共産主義者」をどのような者だと捉え、どのような意義をもつと考えていたのだろうか。本多は「転向文学」で次のように述べている。

われわれの歴史は、なにも共産主義者とかぎったことではないが、すすんで人柱たることに生き甲斐を感じる人々によって、依然として切り開かれねばならぬであろう。これは歴史の鉄則である。

ここにみられるように、「共産主義者」は実践のために命を投げ出すことのできる者だと考えられており、また、そうした人物は現在においても必要だとされている。また、本多は同論考で、「転向」が起こった「内在原因」について、「稀有の特殊人のみがよく耐えうる高次の要請を、「同盟員五百」と称した文化団体の全員に課そうとしたところにあった、といえると思う」と述べているが、これはそのことと関連して理解されるべきだ

ろう。つまり、「共産主義者」とは「すすんで人柱たることに生き甲斐を感じる人々」であり、それは「稀有の特殊人のみがよく耐えうる高次の要請」を実現することができる者だともいえる。だとすれば、本多は、自らがそのような「共産主義者」たり得なかったという痛切な「自己批評」のうえで論を展開しているといえるのではないだろうか。

本多の「転向文学」のひとつの特徴は、一次資料の調査にもとづいたうえで論が展開されていることにある。本多は、「われわれは現在、転向文学というものを、転向の問題をあつかった文学 [……] あるいはもう少しひろくいって、転向問題を制作の主要動機とする文学、と漠然と考えている」が、「その当時の文献を読んでみ」ると、「転向文学という言葉が、前述のような意味で決してつかわれていない、といていいほどの事実」を発見した。そして、当時は「転向作家の文学」が「転向文学」だとみなされていたことなどを本多は指摘し、次のように続ける。

転向文学出現当時における「転向文学」の観念を、ここにわざわざ思いおこしてみることが必要なのは、今日われわれが読んでどこが転向文学なのか解らない作品が、当時はれっきとした転向文学とみとめられた事情を理解するためにであった。ところで、このことはまた、「転向」観念の内容を、当時なにが「転向」とみなされたかを、さかのぼって確かめることにもなるのである。

本多はここで、「転向」とは何かを理論的に定義しようとするのではなく、「当時なにが「転向」とみなされたか」を歴史的に問題化しようとしている。そのうえで本多は、「作家の「転向」という、その「転」はなにからの「転」であり、なにを基準にしたものであったのであろうか？」と考え、「その基準は小林多喜二の生き方であった」という仮説を提示した。

本多の考えをまとめると、次のようになるだろう。戦前期のプロレタリア文学運動では実質的に、「小林多喜二の線」から「離脱」することが「転向」だとみなされてきた。だが、特異な人格の持ち主しかなり得ない「小林多喜二」的主体に、集団の構成員を純化していくような方針がもともと無理を孕んでいたのであり、共産主義者以外も参加する文学運動を組織することが重要だったのではないか。先の座談会でも本多は、「それには自分の体験として、あれほどにサラブレットな、純血なコミニズムを求められるのでなければ、もう少し参加の方法もあろうに、という気持ちがあつたことがだいいち僕にあるわけです」<sup>44</sup>と発言している。

『転向文学論』の書評で久保田正文は、同書が「窄く倫理的な査問意識とは別のところ」で転向論を進める「方向をさし示している」<sup>45</sup>としたが、この寸評でいうところの「方向」の内実は、以上の論旨から説明することができる。すなわち、「共産主義者」あるいは「小林多喜二の線」に同一化しえない多様な文学者を結集していくことが、運動の核

心的な理念として想定されたとき、「転向」をスティグマとし異端審問するかのような権力関係そのものが再考されることになる。なぜなら、誰もが「共産主義者」になれるわけではないことがこの運動方針の前提にあり、さらにいえば、「共産主義者」ではない者の協働があつてこそ、運動は成立するからである。この認識は本多にとって、過去のプロレタリア文学運動の問題点を整理し、今後いかに運動に連なるべきかという課題への回答として、処方箋の役割を果たした。本多はこのようにプロレタリア文学史を捉えることで、自身は非共産主義者として統一戦線を構想するという方向性の模索に移ったといえる。

繰り返せば、本多の「共産主義者」像は命を擲つことのできる者として把握されていた。これは革命家主体の問題だが、思想的内実とはいえないだろう。本多が左翼思想や左翼運動の意義をいかにとらえていたかをみるには、「マルクス主義」という用語がどのように用いられているのかをみるのがよい。本多は「転向文学」のなかで、戦前期の「マルクス主義」について、次のように理解していた。

ところで、昭和初年に燎原の火のごとく燃えひろがったマルクス主義は、隣人の理不尽な不幸にたええぬヒューマニズムの精神と、自我主張も服従も、ともに「内なる声」にきくべきものとし、おなじ自我の尊厳を他人にもみとめる個人主義の思想とを、あの時代の日本で代表していたと思う。[……] それはまた、古く良かりし時代のブルジョア民主主義と少しも矛盾するものでなく、むしろブルジョア民主主義そのものにすぎぬではないか、といわれるかも知れない。しかし、わたしはあの当時の運動を、そのような性格を多分にもつものと理解している。

本多の「マルクス主義」観は、「ブルジョア民主主義」としての「性格」が強調されることによって、意図的にプロレタリア革命と切り離されている。百合子を「ブルジョア文学」を代行した存在として理解しようとしたこととの連続性をここにうかがうことができよう。むろん、この時点においても、宮本百合子という存在は本多にとって重要なものであつただろう。ただし、運動に参画する主体が「非転向」たり得る存在なのかは、「共産主義者ではない」本多自身にとっては重要な問題ではなくなっていた。

本多が行なった、「共産主義者ではない」という「立場」の表明は、百合子の生き方から学ぼうとしていたスタンスからみれば、たしかにある種の「後退」として表現できるような態度の変更である。だがそれは、運動からの撤退を意味するものではない。むしろそれは、プロレタリア文学運動の再検討によって、新しい統一戦線のあり方を志向するものだったといえるだろう。

## 5. おわりに

本多のプロレタリア文学史に関する論考は、不動の大局観を提示したものではないが、一時的な政論だったわけでもない。本多は、他者の文学史観との対話・交流によって、自分の見解を随時更新していった。既に明らかにしたように、本多の宮本百合子論、『白樺』派論、転向文学論は、それぞれ、小林秀雄、中村光夫、小田切秀雄の文学史論の影響を受けている。本多はそれらから学びつつ、過去の事象についての文学史的知識を蓄積し、同時代の論客に提示していった。

本多の批評にみられるこうした対話性を取り逃がしたとき、戦後的理念の体现者、あるいは近代文学研究の大家という通念にしたがって、その文学史観を固定化して理解してしまう恐れがあるだろう。過去のプロレタリア文学についての歴史認識が、現在の運動への介入と連動するところに本多の批評的意義はあった。今日からみれば、本多は文学研究の基礎を準備した先達者にもみえる。だが、当時の文脈においては、そうした「研究」志向の文学史的な営為こそが、批評としての実践性を獲得していたのである。

## 註

- <sup>1</sup> 本多秋五「藝術 歴史 人間」『近代文学』第1巻第1号、1946年1月、3-9頁。
- <sup>2</sup> 伊藤成彦「必然と自由の相克——本多秋五論」『『近代文学』派論』八木書店、1972年、91頁。
- <sup>3</sup> 本多秋五「志賀論 最終の目的 プロ文学再検討の機運動く——下」『東京新聞』1953年11月2日、夕刊8面。この論考は、『本多秋五全集』第4巻（菁柿堂、1995年）では12月2日の『東京新聞』発表とされているが、誤記であろう。
- <sup>4</sup> 本多秋五「文藝時評 左翼文学は不毛か？」『群像』1956年11月号、194頁。
- <sup>5</sup> 本多秋五『物語戦後文学史』新潮社、1960年、46頁。
- <sup>6</sup> 佐藤義雄「本多秋五『転向文学論』ノート」（『本多秋五の文芸批評』菁柿堂、2004年）、上牧瀬香「本多秋五の有島武郎研究——〈批評する主体〉の問題をめぐって」（『戦中戦後文学研究史の鼓動——その一側面』叢刊《文学史》研究、2008年）などを参照。
- <sup>7</sup> この頃の回想として、本多秋五『『マルクス・レーニン主義芸術学研究』と『クオタリイ日本文学』』（『本の手帖』1967年12月号）を参照。
- <sup>8</sup> 本多秋五「小林秀雄論」『近代文学』第1巻第3号、1946年4月、59頁。
- <sup>9</sup> 本多秋五「亀井勝一郎遠望」『文学界』1954年4月号、103-4頁。
- <sup>10</sup> 本多秋五「あとがき」『『白樺』派の文学』講談社、1954年7月、[頁数表記なし]。
- <sup>11</sup> 戦前期の文学遺産継承論を蔵原惟人を中心に考察したものとして、島田昭男「プロレタリア文学と古典——文学遺産継承論について」（『芸術至上主義文芸』17号、1991年11月）を参照。
- <sup>12</sup> 小林秀雄「続私小説論」『経済往来』1935年6月号、325頁。なお、本多はのちに、「小林秀雄

が『私小説論』のなかで、日本の自然主義小説はブルジョア文学というよりは封建主義文学であったと書いたのは、当時われわれにとって青天の霹靂のように思えた。日本の近代文学史を根本的に書き変える意味をもつ発言であったからである」と述べている（「解説」『中村光夫全集』第七巻、筑摩書房、1972年、620頁）。

- 13 本多秋五「宮本百合子論」『現代日本文学論——展望と建設』真光社、1947年9月、173-202頁。以下、同論考からの引用はこれに拠る。改題し、「『冬を越す蕾』の時代」（『宮本百合子研究』津人書房、1948年）、「宮本百合子論」（『小林秀雄論』近代文学社、1949年）、「宮本百合子論の一齣——『冬を越す蕾』の時代」（『転向文学論』未来社、1957年）と単行本に繰り返し収められる。異同があるため参照の際は注意されたい。なお、『本多秋五全集』第一巻（菁柿堂、1994年）の同論考の「解題」は不正確な情報を含む。
- 14 元橋正宜『本多秋五論』（武蔵野書房、1997年）、中山和子「本多秋五の宮本百合子論」（『本多秋五の文芸批評』菁柿堂、2004年）などの先行論がある。
- 15 前掲「続私小説論」、321頁。
- 16 小林秀雄「私小説論（結論）」『経済往来』1935年8月号、369頁。
- 17 中村光夫「その文学史的意義——プロレタリア文学運動」『行動』1935年4月号、278頁。
- 18 中野重治「二つの文学の新しい関係」『教育・国語教育』1936年4月号、146頁。
- 19 平野謙「中村光夫の登場」（『昭和文学私論』毎日新聞社、1977年）は、この中野と小林・中村の論争を三二年テーゼに関連づけている。
- 20 本多は、『近代文学』1947年4月号に掲載された座談会「平和革命とインテリゲンチヤ」に参加したが、「私はこの座談会に出て、はじめから仕舞いまで、徹頭徹尾、語られていることの内容が理解できなくて、一語も発することができず、速記を発表するときに名前を削ってもらった」と回想している（『続物語戦後文学史』新潮社、1962年、15頁）。
- 21 本多「あとがき」『転向文学論』未来社、1957年、276頁。
- 22 本多の歿後刊行された、『本多秋五全集』別巻2（菁柿堂、2004年）に収められる。
- 23 前掲中山論考、145頁。
- 24 発表時の文脈を重視するため、引用は単行本収録のものではなく初出から行ない、書誌情報を註で示した。
- 25 大津山国夫「本多秋五私論——転向、百合子、武者小路」『本多秋五の文芸批評』菁柿堂、2004年、80頁。
- 26 『座談会大正文学史』（岩波書店、1965年）での発言（130頁）。
- 27 本多秋五「日本リアリズム最後の作家——有島武郎の文学」『文学』1953年2月号、119頁。
- 28 前掲「あとがき」『『白樺』派の文学』、[頁数表記なし]。
- 29 前掲「日本リアリズム最後の作家——有島武郎の文学」、114-5頁。



- 30 小林秀雄「私小説論」『経済往来』1935年5月号、355頁。
- 31 上牧瀬前掲論考、165頁。
- 32 前掲「その文学史的意義——プロレタリア文学運動」、278-9頁。
- 33 中村光夫「風俗小説論（上）——近代リアリズムの発生」『改造』1950年2月号、96頁。
- 34 前掲「日本リアリズム最後の作家——有島武郎の文学」、116頁。
- 35 本多秋五「同人雑記」『近代文学』1952年6月号、35頁。同論考は『『白樺』派の文学』に収録されていないが、関連する問題について論じているため引用した。
- 36 本多秋五『『白樺』派の文学』『群像』1951年2月号、62頁。傍点原文。
- 37 本多秋五「ある会合のかへり道」『近代文学』1952年3月号、39頁。
- 38 本多秋五「昭和文学史（2）」『現代文学（1）文学の理論と歴史』新評論社、1954年9月、212-3頁。
- 39 伊藤前掲書、元橋前掲書、大津山前掲論考、佐藤前掲論考、上牧瀬前掲論考など。
- 40 前掲「志賀論 最終の目的 プロ文学再検討の機運動く——下」、夕刊8面。
- 41 小田切秀雄「頽廢の根源について——日本近代文学の場合」『思想』1953年9月号、38頁。
- 42 本多秋五「転向文学」『岩波講座 文学』第5巻、岩波書店、1954年2月、239-277頁。以下、同論考からの引用はこれに拠る。のちに、「転向文学論」と改題して『転向文学論』（未来社、1957年）に収録された。
- 43 上牧瀬前掲論考、172頁。
- 44 「座談会 プロレタリア文学運動の再検討」『近代文学』1954年2月号、18頁。
- 45 久保田正文「新コースへの豊かな示唆」『日本読書新聞』1957年8月26日、3面。『本多秋五全集』別巻1（葺柿堂、1999年）に収録されている。

付記 本稿は日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

(日本学術振興会特別研究員PD)

